

シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）設立記念シンポジウム

「シティズンシップ教育が拓く未来とは？」

2013年3月17日

立教大学太刀川記念館3階（東京・池袋）



主催／日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）設立準備会

共催／立教大学大学院 21 世紀社会デザイン研究科，立教大学社会デザイン研究所

地域や社会の変革と創造のプロセスに参加する市民を育む「シティズンシップ教育」

お任せ民主主義から参加型民主主義への転換が求められる中，既に日本各地では様々なシティズンシップ教育の実践が生まれている。

2013年3月17日（日），シティズンシップ教育実践の広がりと深化を目指して，日本シティズンシップ教育フォーラム（J-CEF）設立準備会の設立記念シンポジウム「シティズンシップ教育が拓く未来とは」が開催された。当日は学校教員，教育に携わる NPO，大学関係者，学生ら 150 名を超す参加者を迎え，様々な立場からシティズンシップ教育実践の状況を報告し，これからのシティズンシップ教育の展望について議論した。

開会の挨拶



異なる価値観が響き合う場

中村陽一さん（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科教授）

シティズンシップ教育は異なる価値観が響き合う場というものを社会に広げていく教育だと考えている。それによって、市民社会を日常生活の中で身のあるものにしていく。このことは、社会デザインにも通じる考え方だ。社会デザインは、社会全体をどう構想するかというプロセスを重視する。本日はみなさんお一人お一人のなかにあるシティズンシップの捉え方・考え方を響き合わせる場にしていきたい。



デモクラシーの中身を考える

水山光春さん（日本シティズンシップ教育フォーラム副代表／京都教育大学教育学部教授）

シティズンシップに関心を持ってから世界の国々の方とお話しさせていただいた。それぞれが民主主義への危機感を共有して持つておられるということが分かった。何か共通のものを示していくことを考えていく訳ではなく、シティズンシップという多様性を尊重する、デモクラシーの中身そのものを考えていくことが肝要だ。その意味でこのフォーラムが多様な人々の考え方を結びつける場になればと思う。



ショートスピーチ

スピーカー 唐木清志（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）

黒崎洋平（神奈川県立湘南台高等学校教諭）

古田雄一（東京大学大学院教育学研究科修士課程、わかもの科代表）

杉浦真理（立命館宇治高等学校教諭）

中村絵乃（NPO 法人開発教育協会理事・事務局長）

村上千里（認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議理事・事務局長）

※敬称略

勇気をもって教育実践を進めたい

唐木清志さん（筑波大学大学院人間総合科学研究科准教授）



シティズンシップ教育の実践を広げようとするあまり、ハードルが挙がらないか不安だ。ある東京の小学校では過疎化した村について、先生が地域の人と一緒に学習しようというビデオを作成した。そこで生徒がビデオから流れてくるおじいさんの言葉を聞いて、『秋田に住むおばあちゃんがなぜ自分たちと東京で暮らそうとしないのか、「この土地でしか生きられない」と言うのか分かりました。』と書いたという。過疎化の問題と自分たちのことが重なっていくのはシティズンシップ教育の土台になるだろう。素晴らしい実践はすでにたくさんある。一つ一つが社会を創造する教育へと繋がると思うので、ぜひ勇気をもってシティズンシップ教育を進めてもらえたらと思う。



誰かの問題がみんなの問題に

黒崎洋平さん（神奈川県立湘南台高等学校教諭）

湘南台高校は平成22年度から24年度にかけて神奈川県教育委員会からシティズンシップ教育の実践研究校指定を受け、政治参加教育と司法参加教育を中心に実践してきた。22年度は実際の投票箱を用いた模擬投票、23、24年度は法案成立を追体験する模擬議会を実施した。また司法参加教育として模擬裁判を横浜弁護士会と協力して実施した。生徒は「今まで政治に関心がないと思っていたが、そもそも政治がどう行われていたかが分からなかったんだと気づいた。」と書いている。この感想がシティズンシップ教育を進める必然性だ。21世紀は誰かの問題がみんなの問題になる。時代を解決していくシティズンシップ教育こそが時代の理念になると思う。



サポートする仕組みを提案していきたい

古田雄一さん（東京大学大学院教育学研究科修士課程、わかもの科代表）

修士課程2年間、埼玉県岩槻高校で実践してきた。1年目は震災について、2年目は岩槻の問題をテーマとした。授業の流れは①まちや社会の課題を見つける②課題を掘り下げる③解決策を考える④解決策を実践する、というもの。最初の3ステップが6月までに実施され、夏休み中に実践する。夏休み明けに結果報告をしたり、振り返ったりした。1年目は被災地支援NPOを見つけて街頭募金を寄付した。2年目は地元図書館に関するアンケートを取って提案した。授業のポイントは自分たちで課題を見つけ、アクションまで起こすこと。また、一緒に思いを実現していくサポートがある。アメリカではパブリックアチーブメントといい、地元の小中学生に大学生がコーチとして派遣されており、さらに大学のゼミとも関連して質保障がなされている。2年間で感じたのはサポートする役割だ。J-CEFでもこうしたことを実現することが可能となる仕組みを提案していくことが大事になる。

個人的なものの中から社会にひらいていくツール

杉浦真理さん（立命館宇治高等学校教諭）



現在の社会課題、教科書に書いてないものをプレゼンテーションして自分たちで提案していくというのをもっとやっていきたい。高校の政治経済の中で主権者を育てるために必要なものは何かと考えてきた。主権者という課題は教科書に載っているが、ローカルな課題はほとんど載っていない。高校生は若者の雇用政策について本当に関心がある。高齢者の問題も意外に考えている。個人的なものの中から社会に開いていく、そういうツールがシティズンシップ教育だ。たとえばいす取りゲームで雇用を考えてみたり、原発も賛成反対両方の論者から話を聞いて熟議する等、様々な考え方から選びとる。何か一つの理論に導いていくのではなく、様々な人々の手をそろえてシティズンシップ教育が広がっていくように期待する。

ここに来られない人たちの参加を考えてほしい

中村絵乃さん（NPO 法人開発教育協会理事・事務局長）



開発を途上国だけの問題とするのではなく、私たちに関係している課題として解決するためにできることを行動していく。というのが開発教育だ。日本だけではなく、全てのことが世界との関係で繋がっており、最終的には地球益を尊重するグローバルシティズンシップが大事だろう。とにかく参加して、その中で民主主義をつくっていく。参加できないのは色々な背景があるからだと考えている。社会的に力を弱められている人たち、ここに来られない人たちが居るかもしれない。このフォーラムに誰を呼ぶのかということも大事な視点だ。そうしたときに社会参加を広い視野で考えると、在日外国人の方々も参加できない選挙も限られている。開発教育やシティズンシップ教育は地域から考えていくと良いと考えている。人権教育や多文化共生の活動から学ぶのも良いだろう。世界の課題とつなげて考えていくというのが大事だ。



ESD≒シティズンシップ教育

村上千里さん（認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進
会議理事・事務局長）

ESD(education for sustainably education)は持続可能社会の実現を目指して、一人一人が世界の人々や将来世代、また環境との関係性の中で生きていることを実感し、力をつけていく教育。まさにシティズンシップ教育だと思う。ESD は開発教育，多文化共生教育，人権教育など，多様な教育とどのように重なるのか。ESD は，扱うイシューの内容ではなく切り口から名前を付けられている。そのため，ESD のエッセンスは持続可能な社会の担い手としての価値観，社会変革のための力，そうした価値観や力を育む学びの方法であり，多様な教育と重なりをもつ。また ESD が進められていくための仕組みや体制も徐々に整えられている。仲間を増やしていくのは難しいと思うが，協働して実質的なシティズンシップ教育を進めていけたらと考えている。



パネルディスカッション

パネリスト	岡田泰孝（お茶の水女子大学附属小学校教諭） 林 大介（模擬選挙推進ネットワーク事務局長） 水山光春（京都教育大学教育学部教授）
コーディネーター	中村陽一（立教大学大学院 21世紀社会デザイン研究科教授）

※敬称略

中村 ショートスピーチで非常に多面的に実践のポイントが語られた。最初にパネリストの方々から簡単な活動紹介を交えつつ問題提起をしてもらえたらと思う。

岡田 シティズンシップ教育というテーマを掲げて「市民」の授業で5年間実践をやってきた。サブテーマは「異質性がいき交うシティズンシップ教育」。大きなテーマは交響だ。研究冊子には「自己肯定感を持ち、安心して他者と語りあえる。他者とともに何か生み出していく。異なりを前提に対話を続けようとする姿」とある。



岡田泰孝さん（御茶の水附属小学校）

「市民」の授業において大事にしていることは価値判断、意思決定、民主主義社会を見る目だ。実践を少しお話したい。震災直後に原子力発電所と火力発電所を比較するために自分たちで資料を集めて討論を行った。一体、自分たちはどちらの立場なのか、立ち位置を表明して議論した。こうした議論をただ闇雲にすればいいわけではなく、評価の基準を考えなければならない。私たちは、クリックのいう政治的リテラシーと関連づけて、これまで「市民」の授業で高学年が身につけるべきとしてきた能力や資質を分類した。基準を設けて、何を育てたいのか。という狙いを据えて、時事問題を積極的に捉え、考えていきたいと思っている。

林

自己肯定感が低いと言われているが子どもは悪いのか？と感じている。2012年総選挙の模擬選挙に6075人が投票した。模擬選挙と実際の結果には若干の違いはあるが、民主党に裏切られたという実感はあまりないようだ。たった一回政権をやっただけで判断するのはなぜだろう、と思って投票した人がいる。



林大介さん（模擬選挙推進ネットワーク）

また地方自治体の選挙こそ生々しいものはない。公立中学校の給食問題などはすごく考えていて、選挙だからといって大人だけの問題に留めてしまうのはもったいない。日本は意見表明の機会をとどめてしまっている。社会が動いていることに対し考えて、政党名、誰に投票するのかを書くということが非常に大きく、責任感が芽生える。大人になって突然投票してくださいではなく、子どものときからトレーニングして一票投じる人間になるのだな、と感じる瞬間に主権者になる。

震災後、被災地の子ども一万人にアンケートしたところによると84%の子どもたちがまちづくりに関わりたいと考えている。相馬高校の放送部の高校生たちは、自分たちが何を思っているのかを取り上げて劇をやっている。この劇を見て、子ども自身が社会に参画して自分の声を言えるようにする機会を創らなければならないと感じた。大人自身も意見参画や社会参加が必要だ。

水山

私は価値のある人間だと思う質問について、中国、韓国、米国、日本で比較すると、日本の子どもたちは自分を肯定的に評価しない。また、政治や社会に参加することは重要だと感じながら、いざ自分がとなるとできないしする気もない。話し合いのプロセスが複雑だと考えているのではないか。建前だけではプロセスの複雑さというのは分からないだろう。

小学校の学習指導要領では社会への参画について言及があるのは特別活動の3回だけだ。

中学の「総合学習」では地域活動に学校側から積極的に参画していくことが大事だと書かれている。「社会科」には地域社会の形成に参画してその発展に努力しようとする態度を養うため、社会参画の視点を取り入れた調べ学習を行う。総合と社会のスタンスの違いは、「社会参画」が動員の道具に使われないようにする点だ。ところが総合は社会参画が目的になっている。社会参加をゴールにせず、子どもたちが思想や信念を獲得するための手段と考えると、スキルや技能を個人的なもの和社会的なものに分けて捉えることが大切だ。その点で岡田先生の評価の観点に共鳴した。スキルを育てていく学習のプロセスは、問いを立て、その問題が生じる原因を考えていく学習が得られればいいだろう。シティズンシップの育成はどのような学習プロセスであるべきかという点、特に個人的スキルと社会的スキルが重要ではないか。



中村 いくつか論点の整理をする。政治的リテラシー、未来の有権者を育てるといった議論があった。もう一つは、いまの若者たちの意識や姿を浮き彫りにすることを引き出しにしておられた。そうした2つが焦点化していたように受け止めたが、1～3名の質問に限って会場から受け付けたい。

参加者 1 埼玉県の施設の文化活動の手伝いをしている。成功体験を積み重ねてエネルギーを続けていくことは原動力になるのか。みんなでやっているという満足感で進めることは、ある種の優越感も生じる。シティズンシップ、公共性という言葉とのギャップはないだろうか。

参加者 2 テーマについて、それぞれの方に「未来とは？」の点について伺いたい。

参加者 3 効果測定をどう考えるか。アンケートもあり得るがどのように行うことができるか聞きたい。また、シティズンシップ教育の内実はどうなっているか。



熱心に聞き入る会場の参加者

参加者 4 メディアリテラシーに関する視点とシティズンシップ教育を理念的・実践的に接続する必要があるかどうか。実践を行うにあたってどうすればよいか。

参加者 5 年齢によるシティズンシップ教育への違いについて伺いたい、

参加者6 イングリランドのシティズンシップ教育を調べていると、子どもが学校運営にかかわっていく形がほとんどだが、そうした面はあるのか伺いたい。

中村 「私が応えたほうが」というものから優先してお応えいただければと思う。

岡田 今だけでは評価できないものがある。評価できるものは表にして提案しているが、中学、高校とこういった教育が続いていくとも関係があるだろう。また、各学齢に応じた学び方があると思っている。そうした機会を制度として保証できるかどうか重要。やる先生とやらない先生が出てきてしまう。日頃の生活の中でルールを子どもたちが決めて守られない場合、日頃から先生たちがどうしているかが問われるだろう。

林 評価にしては意識調査くらいしかできないのではと思う。メディアリテラシーについては、情報を読み解く力をつけてもらいたい。「一面の見出しをどう読み解くのか」「書いてあるキヤッチコピーは」なども含め一緒にやっていけるものは親和性が高い。

年齢による違いだが、年齢なりに大人はこう思っているんだな、といった事後のふりかえりを丁寧にやっていくことが重要だ。例えば政策的には共産党はいいこと行っているが表が取れない背景は何だろうか、などの背景を探ることが重要ではないか。

水山 優越感という話があったが、自己肯定感をしっかり持てるのはよい。しかしそれが傲慢にならないようにする。これは謙虚さのようなものをどこまでキープするのかということだ。「いいこと」を「いいこと」として突き進んでいくだけではうまくいかないだろう。落としどころを見つける、妥協するなどの体験がないと、なかなか「強いシティズンシップ」のようなものは育たないのではないか。

評価についてはパフォーマンスの評価しかないのではと思う。それを測る基準をどうつくるか。また、メディアについては、メディアと自分との間で出来事がつくられていくという相互関係の中で考えることが必要ではないか。

中村 **本題に向かって話がしたい。それぞれ全体を通じて、又は他に補足することがあれば述べていただきたい。**

水山 シティズンシップ教育には2つの側面がある。ひとつは政治的リテラシーと言われるような「強い市民」。もう一方は、弱者に対するまなざしを持ち、あたたかい、しなやかなシティズンシップ教育もあるのではと考えており、この両方を育むことが必要だろう。

林 模擬選挙が全てではない。しかし、「自分が主権者なんだ」ということを考えていかなければならないと考えている。だからこそ「あなたはどうか考えるの」ということを、子どものときから体験していくことが必要だ。

岡田 「社会には一個人の努力でできることとそうでないことがある」ということ。自分の利益と他者の利益がかならずしも一致しないということもある。不利益を被る人たちのことをマジョリティが考える社会。立法や行政、NPO・NGOなどが対応することになるだろうが、そうした考えを育成できるかどうかがシティズンシップの根幹ではと思っている。

中村 いくつかキーワードがあった。

ひとつは「レスポンスビリティ」。日本語では「責任」と訳しているが、少し齟齬がある。応答能力、反応していく能力を涵養することが私自身は意識せねばならないのではと考えている。専門はソーシャルビジネスやコミュニティビジネスを活用したソーシャルイノベーションなのだが、「ソーシャルインパクト」という話をよくしている。つまり「社会がどう変わったか」を示すものである。どの程度その取り組みによって地域や生徒が変わったかがキーワードになるとしている。

二つ目は「レジリエンス」。復元力や復活力などと言われたりしており、防災の分野でつかわれてきている。そういうものからいかにレジリエンスを発揮していくのかという点。傷つきやすい弱い個人、傷つきやすい弱い紐帯こそ変化を起こすという研究もある。



中村陽一さん（立教大学大学院21世紀社会デザイン研究科）

これからの日本シティズンシップ教育フォーラムの活動に向けて「これを提起したい」ということがあれば一言ずつ語っていただければと思う。

岡田 社会科に関わる分野の方が多いが、リテラシーを考える上でアートや音楽なども深く関わるとしている。そうした分野の方もフォーラムに巻き込めればいい。

林 「みんな違ってみんないい」と言うが、違いを認め合っているのだろうか？と思う。違いをどう認め合っていくのか、その中でどうしていくのかを考えていくのが大事だ。大人の側がびくびくしている部分があると思う。子どもと大人と分けて考えるのではなく、もちろんこれからの社会を担う世代の声も大切だと思うが、対等に言葉を交わしていくことができればと思う。

水山 シティズンシップとは多様な人たちが多様に関わっていくということが必要だ。アンケートスライドを見ていただいたが、衝撃を受けたデータがある。「どんな授業を望むか」と聞いたら「教科書の内容をきちんと教える授業」を希望する生徒が圧倒的に多かった。この風土をシティズンシップ教育がいかに変えていくかということだろう。18世紀後半の新しい国づくりをしていたアメリカをイメージしたい。個人の権限を大切にしながら、共同体としてあるべき方向も考えていく、そうした方向性を見ていきたい。

中村 「新しい傾向」について1点触れていないのでそこについて触れておきたい。若い人が多く動いてきている。彼ら／彼女らは「スーパーマン」「スーパーウーマン」ではないが、社会の課題に気づいて果敢に動いていっている人たちです。そうした流れに期待したいと考えている。

以上をもって、パネルディスカッションを終わりにしたい。

総括講演



日本におけるシティズンシップ教育の課題

児玉重夫（日本シティズンシップ教育フォーラム代表／東京大学大学院教育学研究科教授）

まとめてきな話をさせていただく。シティズンシップが元々どういう意味かと改めて確認したい。市民性、市民的資質と訳されることが多くなっている。元々は政治体制を構成する

構成員という意味である。歴史的にはもっと前だという節もあるが、直接民主主義が行われていたアテネの都市国家の時代からの言葉だ。

市民ランナーにはプロではないという意味もある。政治に参加するという意味かつ、専門家ではないという意味だ。市民を育てるシティズンシップとあるが、あえて色分けする意味でリテラシー要請型のシティズンシップ教育と社会参加重視型があるのかなと思う。前者（黒崎氏、岡田氏、杉浦氏、林氏）は論争的な課題を一緒に議論して考える。もう一つ社会参画だとあったが社会と出会う、社会とのつながりを意識化する（唐木氏、黒崎氏、古田氏、村上氏）面がある。カリキュラム化にも二つの方法がある。一つは「領域化」（教科化する）だ。シティズンシップを一つの教科にする方法だ。それから二つ目は教科として領域化しないで、各教科としてつなげていくという取り組みの方向性がある。それから教科横断的な方向性もある。

なぜこのように二つに分けてみることに意味があるかという点、イギリス政府はバーナード・クリックらが中心となってシティズンシップ教育を構成する三要素を述べていて、とりわけ政治的リテラシーが重要だと言っている。政治的リテラシーを省いてしまうと使い捨て要員になってしまう。当該社会にとって都合のいい「使い捨て要員」ではなく、政治的リテラシーを備えた市民であることが重要。イギリスで言えば参加と道徳とリテラシーが一体的に言われている。

政治的リテラシーの樹形図で、意見が分かれている争点を知る。それに対してどういう選択肢があるのかという判断をし、どういう意思決定をするのかというのが重要だと政治的リテラシーの授業では強調されている。押しつけになってしまわないためにはどうするのかというのがクリックレポートに書かれていて、中立的なアプローチとバランスを取るアプローチ、明示的に自分の意見をいうアプローチの三つを組み合わせることで論争的課題を扱うことができる。

その上で、リテラシーと社会参加の二つの側面をいかにうまく組み合わせるのが課題となる。一つは唐木さん、水山さん、古田さんなどリテラシーを組み込んだ社会参画をする。その上で問題を分析する、意思決定、提案し、参加する。こういう流れが提案されていて、古田さんの場合は岩槻の例やパブリックアチーブメントに言及されていました。また中村絵乃さんから社会そのものが多様であるということが重要だと。それから中村陽一さんの方から、社会そのものが可変的で創造的であることが大事だと。政治に参加する際のアクションへ。何もそこに書かれている脚本に演じているわけではなく、演

じる中で脚本を書き換えている。政治とかも演劇的に作り替えている。私自身がつくりかえていくという試みなんだと理解する。リアリティがないと関心をもって考えることができない。現実の政治を扱うことだけでは生々しさを扱うことにはならないかもしれないが。アメリカでパブリックワークの考え方が出てきているのは、共同体主義とリテラシーの両方を捉えるという考え方。そこで中心になって考えられているのは、論争的な課題を議論しながら参加していくというのが強調されている。オバマも先の演説で触れていた。

日本でもシティズンシップ教育の政策化というのが出てきた。アメリカやヨーロッパが追求していることと同時進行的に進んでいる。しかし実質的なものになっていないので実質的にしていく必要がある。教育のガバナンスをもっと参加重視型にしていく必要になってくる。シティズンシップ教育フォーラムとしては、同業の団体を超えて、ゆるやかな横のネットワークをつくれたらと思う。

閉会の挨拶



川中大輔 (日本シティズンシップ教育フォーラム事務局長/シティズンシップ共育企画代表)

長時間御つきあいいただいたことありがとうございます。いくつかの課題が明るみになってきた。話し合い活動も楽しい、どう学校現場と地域は教育協同していくべきか。効果はどう測っていくのか。このフォーラムはどのようにその課題を乗り越えていくべきなのか。一緒に課題を解決していこうというメンバーをみなさんにお示しをした。ともに考えたいという仲間を募っております。ながらく暖かいご支援をいただければと存じます。どうぞ今後ともよろしくお願ひ致します。